身近なまちの風景物語(5)

曲がる誘(いざな)い

道を歩くとき、目にするもの、耳に入るもの、鼻につくもの、肌に感じるもの、そうしたまちの空気を通して、暮らしの息吹を感じることができる。

道にはいくつもの様相がある。交通量の多い道もあれば、人と出会わない道もある。幅の広い道もあれば、路地のように狭い道もある。にぎやかな商店街の道もあれば､閑静な住宅街の道もある。青空が開く道もあれば、夜は裸電球の灯りだけで照らされる道もある。

その中で、スーと入り込みたくなる道がある。路地のように家や店の裏が背中合わせしているような細道は、一目見ただけで興味をそそられる。ただ、私有地の場合もあるので、猫のように容易に入り込めない。

一方、歩行者がすれ違える程度の細道は、安心して進んでいける。沿道の家の玄関がその道に向いていれば、なお一層、足を踏み入れる気持ちになる。

その先に何があるのかな？

もしかしたら、新しい発見があるかもしれない。これまで見たこともないような出会いがあるかもしれない。

特に「曲がる細道」に出会ったときは、なおさらその先に待ち構えている風景は何か､と興味津々になる。

まちの中で、そうした道に出くわすことはそんなに多くはない。なぜなら大概の道は整備され、ある程度先まで見通せることが多いからだ。

そういう意味でも「曲がる細道」は珍しく、またその履歴にも興味がわく。

そんなとき、私は昔の地図を本棚から探し出し、「曲がる細道」のかつての様子を確認する。多くは、そこに水路や小川が流れていたことがわかる。埋め立てられたか、暗渠(あんきょ)化されたかして、細道になったのだ。

現在の「曲がる細道」沿いにある住宅や店は、かつては反対側の道路に面し、裏庭が水路につながっていたようである。細道として整備されると、そこに向けて玄関が設けられた。

こうした細道は大事にされる。両隣はもとより、道を隔てて向き合う住宅同士でも、この細道を共有する意識が働くようだ。

「お互いさま」の感覚で、落ち葉に気づいた家人が周囲を掃き清める。そしてそこを歩く人々を清々しい気持ちにさせてくれる。

また細道は路地園芸の格好の場にもなる。手入れの行き届いた鉢植えや工夫されたガーデニングが通行人を出迎えてくれる。

すれ違うと挨拶し、顔見知りに会うと会話がはずむ。道端で遊ぶ子どもたちの笑い声が響く。まな板の音が聞こえ、夕食の匂いが鼻に入る。

細道という清浄な空気に包まれた心地よい空間は、まちが生きていることを肌で感じさせてくれる。

野中 勝利
筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長

挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群３年）